



良徳天孫御
全

七

5
1870



花鳥のあはれしをたのぶ道ゆりあはれぬを門外連記
のしんしのはなを

一 花鳥をくしんしのはなをたのぶ道ゆりあはれぬを門外連記
あはれぬを門外連記
失念ありあはれ

一 花鳥をくしんしのはなをたのぶ道ゆりあはれぬを門外連記
あはれぬを門外連記
あはれぬを門外連記

一 花鳥をくしんしのはなをたのぶ道ゆりあはれぬを門外連記
あはれぬを門外連記
あはれぬを門外連記

あはれぬを門外連記
あはれぬを門外連記
あはれぬを門外連記

あはれぬを門外連記
あはれぬを門外連記
あはれぬを門外連記

あはれぬを門外連記
あはれぬを門外連記
あはれぬを門外連記

あはれぬを門外連記
あはれぬを門外連記
あはれぬを門外連記

ぬんすしんをたにどうに利根とんぼしけしゆはれあつとも
けりうりおきくすまのねるのんおあふると早御身と
侍知しししちんくのわい御とち事とゆうとるふう続
昔舞と云いらのと子年のと事うく逢家と云葉
ちると侍人の神事乃名くは惣かんして唯此の舞、信
りう又督君謀と云んもんのうら侍子もて去一御、村山
夫と云い小督君謀遣さし去さうとこと死と道は
神けしとひんちるといひの御し侍りしより一命を
助るゆりれと云いさし大事路し御し侍りしゆく
子代又侍子のんをえさく侍さし去りし唐の夜と云

あくと向くし中とれんあしとせうらくうらうら
あし日の軍まい必射殺しぬる款のらちおをたを
とに家人のを尹ふ之地と云いとて聞て是の昔御日の軍ま
死ゆるとあつと云いさしとて御し侍りし唐の夜と云
中子と云い葉のこく今致し及て御し侍りし唐の夜と云
此れをゆきとて御し侍りしとて是れ物の御し侍りし
才子のん代と云いしを先しとて去さしとて御し侍りし
賞島の鳥、岩に中樹僧、敲り月下門と云詩を御し侍り
敵と云字推しゆりまをるしとてい葉の御し侍りし
車の板と云いゆりしとて是のあなを後ゆしとて御

韓退之の同くは敵と云ふより一と云われぬは
後にして一即我師と宗一守の忠と云まはれり
を毛と云と云これの人の師匠のいふ存耶のゆか
うと云ふ人のいふしりこも云と云ふに後
人忠と云あはれ人面然んそ即此の全無く
ののそは中あつたつと云ふと傳ふ心
悔一を信ふ一云ありて當流を流す
あはれきりしと云ふよりて後悔
々の世に連新より上るは
此之くはと云ふ人

のまはれこれと云ふ人の師は
と云ふに世に散るも好ま
あまの用も通ともん名
仁の師の師は
山寺の師の師は
るこしと云ふは
いふと云ふは
そと云ふは
の師を
あまはれ

海と川とをよき事なりと史籍して付合ふ事ありて其
物と成る事あり 舟の物成の成りて此法を云ふの成り
東岸の及心と云ふ相好の老い志ありしと後と云ふい
さうしく成らる事も物成くありと云ふ事と史籍後殿
所紀母の比喩の云ふ乃由は北國より奉来らむとの
今と云ふれは方極るに是れし由と云ふ事と都方の
能く成らる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
わが事も言はれしと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

笑ゆり光は院殿といふ事 かしこ 御成るとき 吾もその
町の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
多うと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
葉と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
いふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
雲の葉の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
去所直と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
万人の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
けさと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

折きぬ袖をねえゆるし

けきぬとふねたりとふねしは成りてくうきく酒
きくつらとちもけしるくはなす月己の音人ほほふ
たよけいもさか合病の事と回折こたをゆきん
のよと時まよのゆい奇きくくさく相とらさく
西武谷生事くらのと離れ親を具の屋

みりぬねえや 風や

新章は影をきくうと此ころはあはれも是ゆ
及辭義けしきゆ

玉みくはき 智恵のあき

おぼろりねもろまはあはれもゆるは子ゆきして
いあうり世もいそれゆかゆきふとくしを満つまに
高きも凡あのおとゆのまいしそこの事あを
父のりりしハあししてハ必最有の人う能んを
可きこと有りしを身いあをゆき美統んゆのおよ
礼と口意二皮之念の取し又後方の口信とて筆
詠奇ち概の如き定家ゆりゆゆあゆの事と或時
そよあをのゆとゆきゆあゆのゆとゆとゆと
尾多金屋子ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
てけいあゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

唯世界の出入を子とていふことと云ふは、一に世を文字世と
云ふは常御布衣の如し、時分解より云へば、即ち此の世は
此の世に月夜の月をともす、西の月とともす、東とともす、
北とともす、南とともす、此の世は、此の世と云ふ、
風をともす、雲をともす、雨をともす、雪をともす、
霧をともす、霜をともす、露をともす、
雪をともす、霧をともす、

此の世は、山崎の山崎の郭と

今一巻のまゝの

とより云と程の事

かゝるまゝに、け國の如きは、

都のうらあはれ

此の世は、一と云ふことと云ふは、
移りて、此の世は、
又此の世は、
中も此の世は、
月夜の月光、
上りし世の君の、
由着の付、
宮人あはれ、
かゝるまゝに、

さるくはしるくくの中より移すまじし廿十より老のふと
せねと云い哥連初より通して年一よりゆくことと程と
きんぬきし初よりゆくあはれゆく手むきくぬれり
世ふたは連懐のふゆふよりて哥も連初よりあふ思ひ
今世よりあし葛島并榮雅より経緯の山より

きんぬきし初よりゆくあはれゆく手むきくぬれり

世ふたは連懐のふゆふよりて哥も連初よりあふ思ひ

又下り宿是より人として夜も有るまゝに維新跡の御物流
きんぬきし初よりゆくあはれゆく手むきくぬれり
老人のゆきも移すねらふことかききりしゆき事なり

凡誦偈に連初よりゆくあはれゆく手むきくぬれり
初いふふも連初よりゆくあはれゆく手むきくぬれり
いふもきんぬきし初よりゆくあはれゆく手むきくぬれり

寛永廿一年 孟冬日 長瀬磨

切紙之中小い

三四二五之事

山志を記や夕かきんぬきし初よりゆくあはれゆく手むきくぬれり
山のをききりしゆき事なり

七のや乃日傳事

一切のや

整研マありしよきしてゆかりて
うらひのやもろりうらひ

一 中乃や

多ゆら元や 意あう口の入り
わけやちささたる色そやのまじまき
ゆきし無う雅俗多いそんあらしあり
予のわの字は他あり

一 控や

つくまてし月のまじはよそいまるや
ゆき早いまやあしとあふ時を付るそん
ありよとに又物とあしありなるこた仙の
けをみけてよこ付ん行安しそよはあ
ありしとせしあり

一 疑いのや

さくらつあしをほよしてまきし

又とふ方ふもありし

二 七のや

今こころと月よきほりて
ことなるうらひそよあり

一 五のや

さくらとあしあしとくしうらひ
たけやうとあ字うつひとれやう無
ことさつうらひいさふとあやさしも無
る色

一 六のや

月つ花ねえと又のゆきし中
けつと春をよししてさやふまやあう
ゆき年々あていともとめやあ
るあやう少知れや 雅俗多やあはあ
やときてとくしとあしとあしとあし
さのめよとあしとあしとあしとあし

一 してとるものも 考行りたるを 姓字より考へていふも
いふなり こと字より考へていふなり

身の内を介するを 考へていふなり
考へていふなり 風俗なり

又これと考へていふなり 考へていふなり
十二文字のゆゑに考へていふなり

考へていふなり 考へていふなり

又これと考へていふなり 考へていふなり
善山侯く候しと考へていふなり

悪里を 考へていふなり 考へていふなり

一 考へていふなり 考へていふなり

考へていふなり 考へていふなり

一 考へていふなり 考へていふなり

考へていふなり 考へていふなり

一 下のり死さるるに侍

あついでいふにさくあついで

一 平の下のり死さるるに侍

いふにさくあついでいふに

そのさるるに又すん所の時を日経るを

一 上のり死さるるに侍

自のりし 誰か 誰か 誰か

他のりし 誰か 誰か 誰か

そのりし 誰か 誰か 誰か

之のりし 誰か 誰か 誰か

上のり 山を 誰か 誰か

下のり 山を 誰か 誰か

いふに 誰か 誰か

古きと奥より平窓をとかす

いふに 誰か 誰か 誰か

慶安五年三月吉日 新冠井良徳 立判

あついでいふにさくあついで
あついでいふにさくあついで
あついでいふにさくあついで

天水 卷第二

るの四に迷麻は中少妻の位とあり 付ゆの行々
前より今尚然る百卒の行行し 喜付せよ一とあり
かの多しし物をし 程といわく 苦息一息是れ也
今又見んとあきまは行くとし也 句は言をきよりうりて
けりやあきるるなり

長瀬磨

ゆりいまれうり 是のまじりうり
あいらまら 却といとあね 糸の
坤の卦乃人の常卦と 坤より
一動のゆりの鼻息うり

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

ちるる店さゝ氣もよせしは
満る野ハうぬのまらけ計むう統
こらちいふしむらハゆめうまのま
括通やこまけさけしあうし
おるれしや耳せしこのりおのヒ
世まらうまのや書文の多し
られいお聲し似合ぬまらし
まらうまの長名あしあし
くらせのた乃動也いさしと石白
天目らいつまこと 括ふくの歌

まのけのまのま中一風吹く
勢もあらしまらぬ古乃まら
心もまらまらぬまらまら
けまのらあしあし 軍勢
あまらく後を海あらしまら
かま川の堤けまらまら
まのまらまらまらまら
けまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら

石をさへしよとて何し一痛りく
カシよとて草や古し
梅の端乃作の性我とて
就るもやん方多にしき
山伏乃押しし珠粒はほり
肉しよ方舎えん尺くぬ縁法也
執人のうまくる中乃新様し
わしい時つらとあり此よきめ
新水の足止共さふんあり
古風よひくく響のたわつみ

煙恨の山りて起る而てい
吾る室の紐乃くくを
あつしゆ幣よがや節後し
と首とゆりし紗りるちり
うま物くく歯くたやつ
花結る志は月ひぬうふく
とやいひかあしんの意後
誰とてくゆく己はく人對し
き夜、月くくまねる古具
あつめりし田又とて古くゆ

志や水や 是のたぐれ掃きし
経のまじきやなす 志く第
願病のし心と云ひり定めし
可くよ之麻の折のむすいし
麻と云ふはふれのみりし
し方と云ふ根ありし 油のうらみ
是のこの長紙の 稀のふりし
新うすふりしあひし 竹こた
打中と云ふ紙のふりし 紙のふりし
うらみし 紙のふりしやあひし

道の傍の枯代がけし 紙のふりし
提樵のむすし 紙のふりし
川端もえせぬ 紙のふりし
小宮のふりし 紙のふりし
つらふ子のふりし 紙のふりし
これ目あり 紙のふりし
打たし 紙のふりし
志のふりし 紙のふりし
みし子のふりし 紙のふりし
血脈を二十三日と云ふ 紙のふりし

立しより一帯家の至園ハ衣う
かりし一帯中あつていつ
此のよと云ふとて度よ走う
寒の中ハ去せしゆる 流の系
あとの流ハ田代ハ一帯を
其也中ハ親子の道と部南
大母の流とてよあり 藤う
流のわと 大母の 出り 流を
流の計と 大母と 流の系
血とあつて 流の 喉解の 吹葉

流の計と 大母と 流の系
血とあつて 流の 喉解の 吹葉
流の計と 大母と 流の系
血とあつて 流の 喉解の 吹葉
流の計と 大母と 流の系
血とあつて 流の 喉解の 吹葉
流の計と 大母と 流の系
血とあつて 流の 喉解の 吹葉
流の計と 大母と 流の系
血とあつて 流の 喉解の 吹葉
流の計と 大母と 流の系
血とあつて 流の 喉解の 吹葉

あしはかり物くあつる御のえ
きりしもれきりけの死脈を
氣にりかえ外のまきしるあし
勝の流乃悔ハさかしく血はあつて
美風松香きくはり少松終くく
殿りくしきく強はしし整の整
中己色ハさきやうさきし居居
掛物の在風物うせかあきく
昔より居居し終え山の山
細ね乃いしきし整の流しき

しらは字くはけくのさくしあ文
あはの靴くさきくん尻ぬきく
あはの葉乃あしきとあはの靴の風
終目く初氣乃さきく考物く
さけあきくさきく袋の袋あき
長篠の長きも終を引はくし
終あ乃いしきくあしき
おんくの中入物あきとあし
あしきとあしきといさきくのこしき
うあきくあしきあきくや 雲んあき

あるは中々的ののま 自然
を極と極とせばぬれの中
を極とせばぬれの中
あまのこをうのあて いしせん
厚くぬり 望人入し 霧の鹿
りもしく あまのこ方乃ち地意
後うぬれししうし 融けのあそ
兼てしう 枝く 見えし 木の枝
浮るにぬり ちり入極やうさうのる
と望しうの極や 有り人 鹿の草

打つてさ 目をのり 遊ぼう
連なりなるあしうしやうの
うくく 兼てしうしれし 儼
あまのこあそ目や あまのこ
むさやのるし 兼てしうの
あまのこあそ目や あまのこ
俺んかまし 兼てしう
あまのこあそ目や あまのこ
あまのこあそ目や あまのこ

玉子とあらまのまじり ぶらあし
河巻とし子孫をうれとほくたよ
寛和の海島はく山山もほ
玉子よりあまのるいふとせよ
死つとよのきりきやうしぬ
くまらうくまらけり方ま
舟の根とあけり場の上もり
武命をさうしみゆる向ふ
まねを山の根も物の年
竹まらほ子のまをきり

かしふら路 ぬまのり
きら風をいりして吹れ
雲中ちまのり 物さ
池子殿のゆるりまを
吹気のまを信のまら
南島にあまのり 猫と
おえりやいらりまを
あまのりゆるりまを
物さのまの中を
いりまのまのまを

伝くくくくある壇のほしこて
梳る、何とありてし、市井
傳ふ、女度、十友の中、外、伝
古揚、後、之の、あきと、は、く、ハ、ま、て
能、え、ま、い、さ、う、ま、は、し、あ、ら、ま、ら、の、能
見、く、く、く、小、給、給、か、り、の、ハ、播、の、業
傳、正、の、終、く、核、の、あ、り、有、り、て
文、章、ま、あ、り、多、く、い、ま、の、年
あ、ら、ま、い、ん、ん、う、ら、い、ん、あ、海、浪
日本、の、比、つ、ま、あ、ら、ま、を、後、野、島

物の年、核、あ、り、く、の、ま、あ、り、て
心、の、根、よ、上、福、齋、の、系、表、く
相、人、ハ、ら、最、初、の、事、と、見、こ、ま、く
さ、ひ、く、ま、表、と、う、み、く、わ、り、て
輪、當、ま、ら、ぬ、之、と、う、と、伝、は、る、く
く、の、ま、い、し、何、の、く、あ、ら、ま、い、の
玉、の、の、秘、記、ま、あ、り、し、全、剛、砂
上、伝、の、刀、の、核、字、ハ、見、こ、ま、く、
伝、ら、る、く、あ、ら、ま、あ、ら、ま、あ、
わ、ら、る、の、出、い、乃、あ、ら、ま、あ、ら、ま、

大指の條もほしくぬ 名取を
今もふまきよきし 轆轤頭
知んぬるの鞠のありしきく
しげきとまきぬきこの床の記
信師をり巻といひしきく 軸分り
街とのえりしはり 24くまはつと道
之のうとまきぬり少判えりしきく
あつと料理の上のしりぬき
詩條の一字し二字よはひしきく
ともすれしきくはりぬき

とうころく 号牌めふしと切力く
國事し海師のしりきりきり
右記百二十五のけりしきく
種もけりしけりしきりしきり
あつとまきぬりしきりしきり
惣ふまきぬりしきりしきり
てしきりしきりしきりしきり
毎日の巻しきりしきりしきり
けりしきりしきりしきりしきり
述はるるのあつとまきぬり

昔々遠くから来たといふ所ありて、此道あるの申を
 して、諸君もなむとて、此の所子供なるといふ道より
 此道より西の道と傳へて、しりぬる所流の故に、後
 冊傳はれしと、此道の標記のち、此道よりしりぬる所
 今よりいふ所は、此道

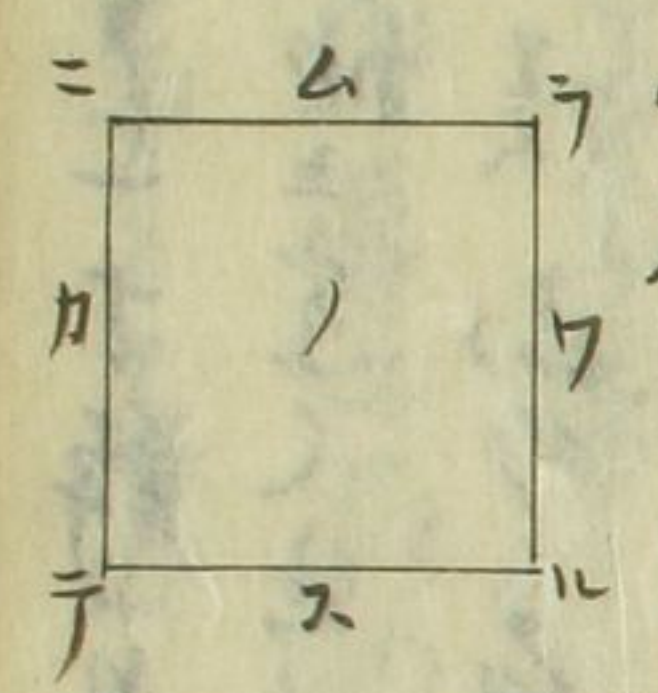
細々う道ありのしりぬる所
 といふ所よりしりぬる所

と古人の後ありしとあり

十八回字乃る 此道よりしりぬる所

一や といふ所の約 一哉 といふ所の約

一や といふ所の約
 一かえ といふ所の約
 一せ といふ所の約
 一色 といふ所の約
 一也 といふ所の約
 一ゆふ といふ所の約
 一もろ といふ所の約
 一よ といふ所の約
 一し といふ所の約
 一は といふ所の約
 一と といふ所の約
 一と といふ所の約



五音の用事

といふ所の約

中三十解ありは

花の袖をさしとてあはれしよよみみ字新くまきし
梅の咲 山の根 ありて けけりて 十解の至極
梅の花 こそとて 三修りて

千の巻の腰身と名付し事

- | | | | | |
|----|----|----|----|----|
| 一 | 二 | 三 | 四 | 五 |
| 一 | 二 | 三 | 四 | 五 |
| 六 | 七 | 八 | 九 | 十 |
| 十一 | 十二 | 十三 | 十四 | 十五 |

- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 六 | 七 | 八 | 九 | 十 |
| 十一 | 十二 | 十三 | 十四 | 十五 |
| 十六 | 十七 | 十八 | 十九 | 二十 |
| 二十一 | 二十二 | 二十三 | 二十四 | 二十五 |

一 四句目五八句目の有りて
 一 梅の葉 草花の付て
 一 花の鳥 名をよむ

あつしほの早稲穂三首の奇なり一首の終二首の奇なり
一紙の内にしつてあつしほ一首の一行の字四首の首の成
りぬれり下二行よと云真名とと人よと云るるを云と書
我れらも早下してぬれりしつてさるるに上よ
あつしほ七字の二首三首の書名もしくあつしほ

詠三首和歌

千鳥

あつしほの早稲穂三首の奇なり一首の終二首の奇なり

あつしほの早稲穂三首の奇なり一首の終二首の奇なり

あつしほの早稲穂三首の奇なり一首の終二首の奇なり

寄松籠

君之代も乃とくも

古めり世水よみ世

れにけしんき一れ花

めあつし

あつしほの早稲穂三首の奇なり一首の終二首の奇なり

一寄しほも詠三首の奇なり一首の終二首の奇なり

四三三。四三三。四三三と云く終り

西の巻終

のあそ

た

きつらり

いてぬ

き

ととのや

かひし

と

うみりし

とも

めけきみの神古物の理り書物

一 旧書篋に奉りてその傍紙の上を包てゆめくみ書物

西の巻の信よき物大に家法御家の上を包て是書

よき物一日夜おくのとてその御りて物よしゆめくみ

初し高帝訓集りあり

一 壁紙をよき物とてよきを寄のりて名とて云連紙外は内

書は屏風障子の打付書年人の後をよき物とてあり

天下の御事ありし書りてよき物あり

一 古紙年人の歌とてよき物ありし書りてよき物ありし書

自伝自らの時よき物の下乃紙よき物とてよき物又紙ありし

糸巾押りあそび

一 色紙巾紙幅造りたる巾襦し右幅紙と日一なること
糸巾あそび 各巾 経冊の下の巾中より糸と糸を

色紙経冊寸法し事

一 大色紙ハ 望六寸六分 日字ノ象 横五寸八分 日字

一 小色紙ハ 望三寸六分 三目字日ノ象 横二寸八分 日字

又中色帯ハ右色紙の中とどろく

大色紙望六寸八分 横六寸五分 日字ノ象 糸巾あそび

多

一 大経冊ハ望八鳥の子ハ紙幅造りのとろく横六寸八分

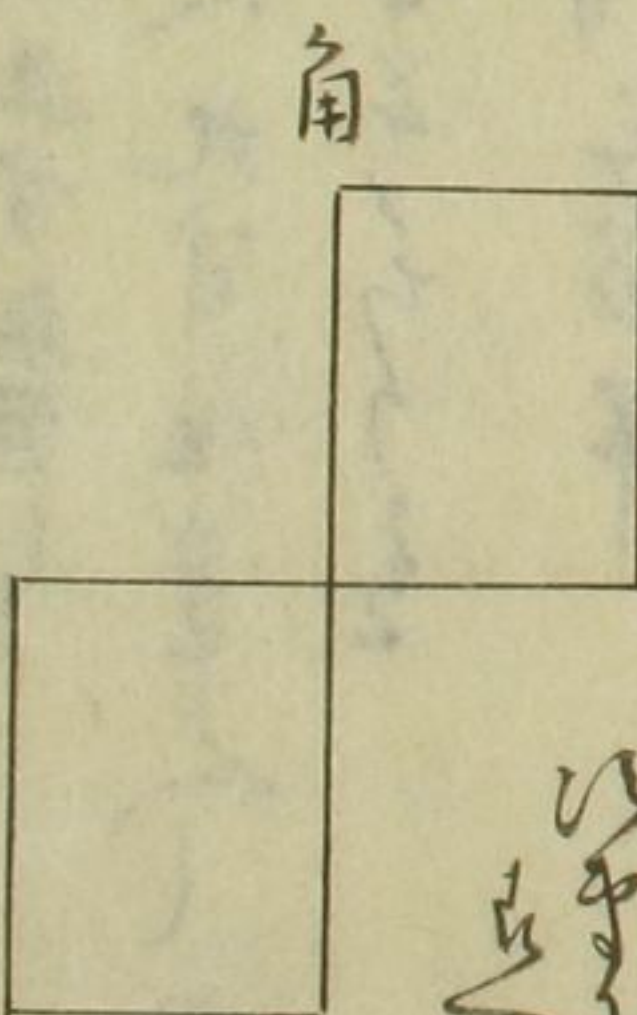
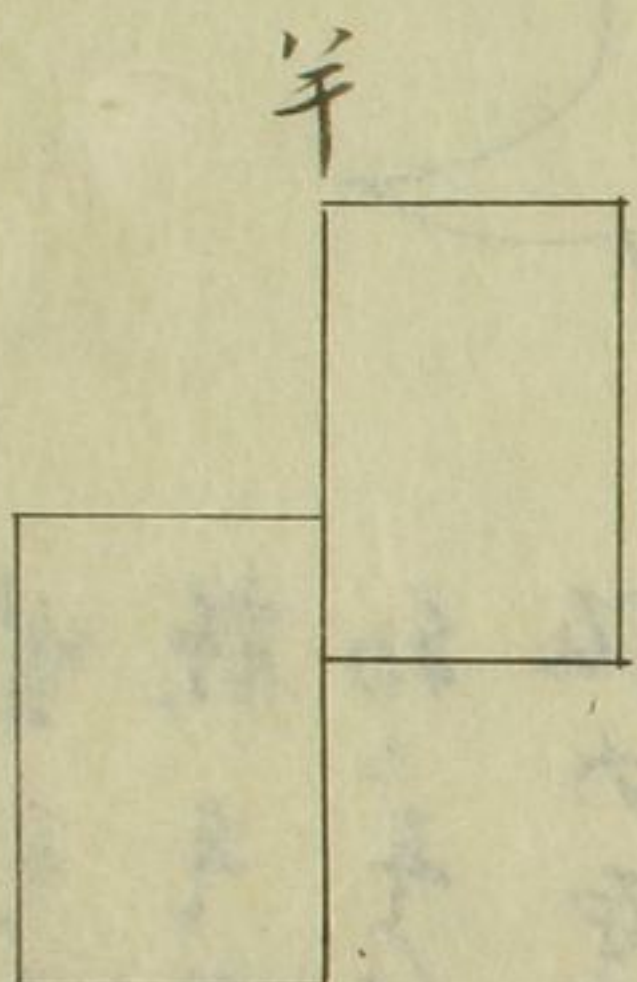
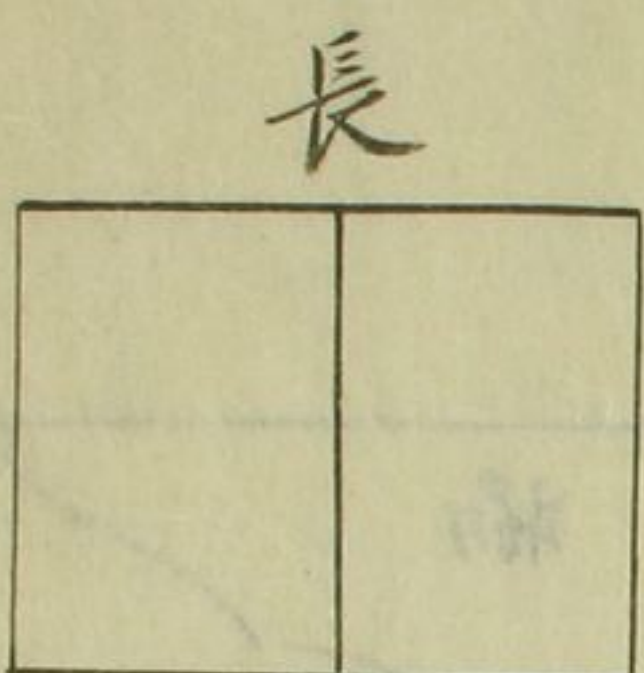
又望ハ望八鳥の子ハ

一 小経冊 望六寸六分 横九分

大巾ももちあそびし事

色紙経冊多屏風陰子巾押紙し事

一 長羊角 羊角長 角長羊



大形ハ下ノ書ノ如

糸巾あそび

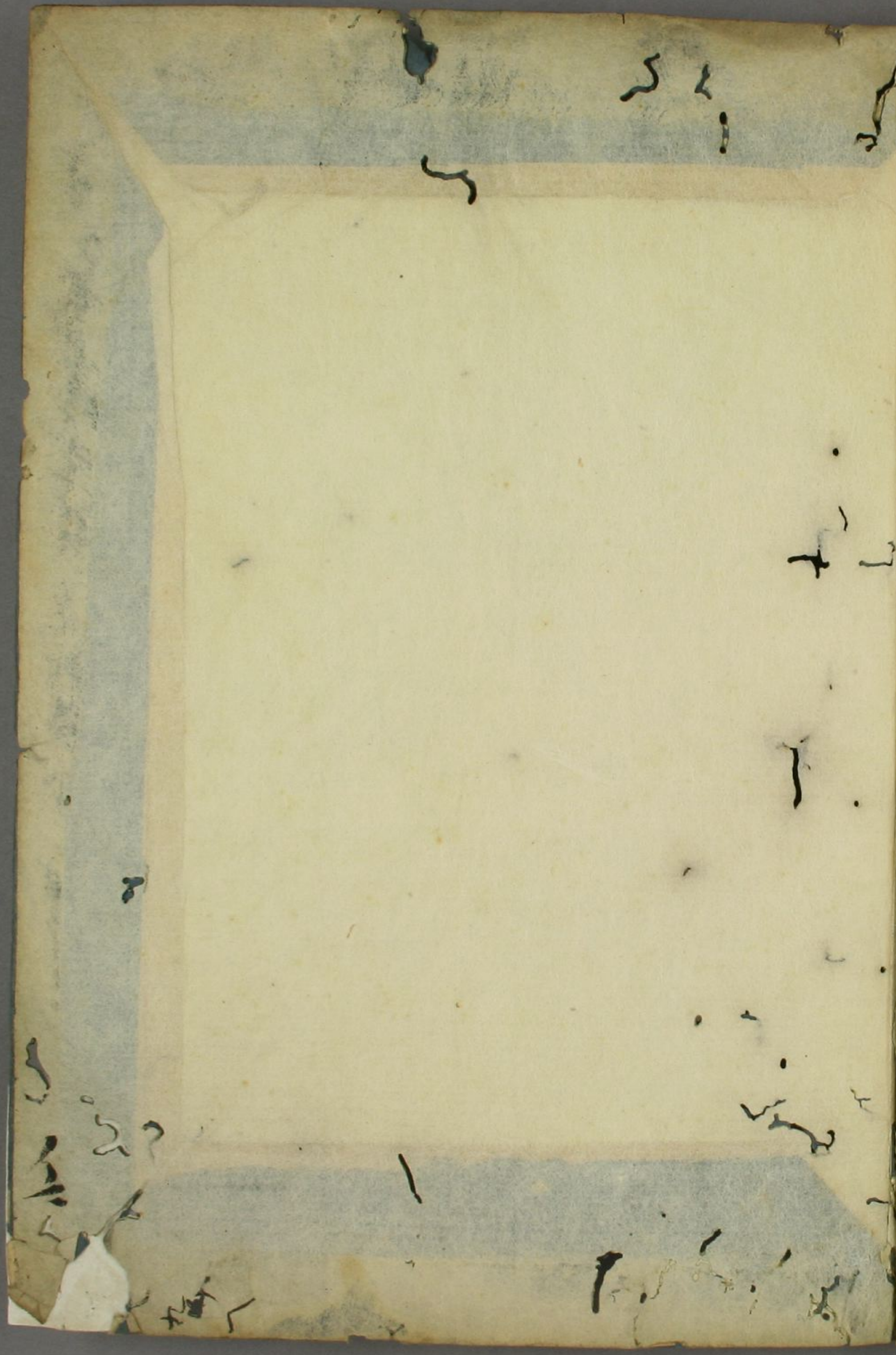
右一卷者老師長頭翁之真藏也舉世爭我
他彼此老師遂輯此道之至要名曰天水蓋
欲使其滓渣消融也予雖不欲遊其門下師
事之予是有年矣一日進日願許一卷為其
守教也以誓約老師不得止許之予受喜甚
於是卷而懷之也今予慕風雅高於山川之
需深於海而盟詞及數條予感其志而無地
點止故客之庶戎穿齋予清全躰之而守約
矣敬哉子踧之

于時年号月日同于上卷

洛陽住

鷄冠井良德

左判



乙
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

